2 馬という動物を知ろう

馬という動物

馬という言葉を聴いて皆さんはどのようなことを思い浮かべますか。鬣(たてがみ)を颯爽と風になびかせて走っている馬、大きな目でじっと見つめてくる馬、競馬場を疾走する馬など、人によってそれぞれの馬の姿があることでしょう。また、「オリンピック中継で見た馬術競技」を思い浮かべる人もいれば、「スポーツ新聞に載っている競馬」を想像する人、小さいときに連れて行ってもらった「牧場で乗った馬」の経験を思い出す人もいると思います。戦後、急速に身近に飼われる馬の数が少なくなった日本では、人によって馬に対するイメージや意識が実にさまざまです。

馬という生き物と触れ合い関わりあいを持っていくためには、馬のことをよく知ることがとても大切です。一緒に活動をしていく馬のことをよく知れば知るほど、馬の気持ちを理解しやすくなり、馬とのよりよい関係を作ることができるようになります。

馬と人間

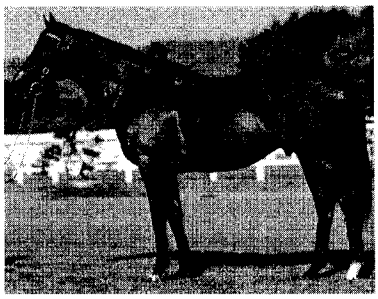
馬が、人間に飼われ密接な関わりを持って生きるようになった、つまり人に飼われるようになったのは約6000年前といわれています。それ以来、馬たちは常に人間と生活をともにし、人間の生活に深く関わりあい、歴史にも大きく関与してきました。犬や猫の品種などと同様に、人間の必要とする様々な目的に応じて馬は改良され、新たな品種が作られてきたのです。

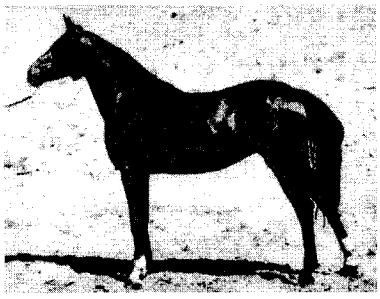
馬の種類

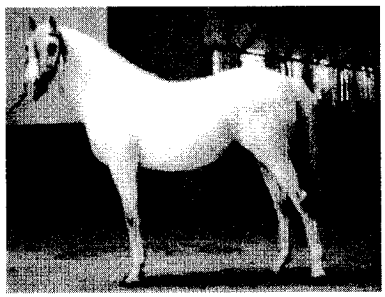
世界には多くの種類の馬がいます。私たちが耳にしたことのあるアラブ、サラブレッド、クォーターホース、北海道和種馬、木曽馬などの名前は品種名です。犬でいうダックスフントや秋田犬などと同じです。その品種の数は、少なくとも200種類をこえるともいわれています。これらのさまざまな品種の馬は全て生物分類学上「家畜馬」と呼ばれます、同じ種に分類されます。

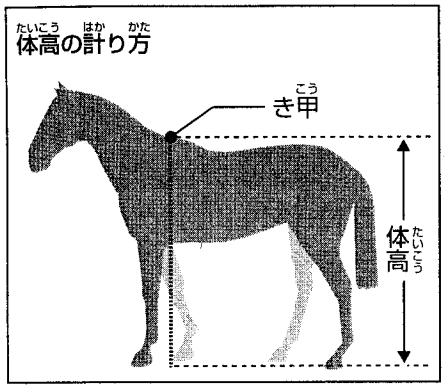
世界中には、ヨーロッパおよびアジア大陸で改良されたクリーブランド・ベイ、シェットランド・ポニー、クライスデール、ホルスタイン、ハノーバー、トラケーネン、ブルトン、ペルシュロン、アンダルシアン、アラブ、また、アメリカ大陸で作られたクォーターホース、アメリカン・トロッターなど実に多くの品種の馬がいます。

日本にも昔から飼養されてきた在来の馬たちがいます。明治時代以降の「強い軍馬を作る」ための政策や、第2次世界大戦後の急速な社会の変化で絶滅してしまった馬も多いのですが、現在も残っている在来馬は、


▲サラブレッド


▲アラブ


▲リピッツァーナ



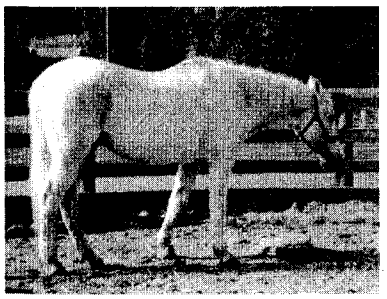
北海道和種馬(北海道)、木曽馬（長野県)、野間馬(愛媛県)、対州馬(長崎県)、御崎馬（宮崎県)、トカラ馬(鹿児島県)、宮古馬（沖縄県)、与那国馬（沖縄県）の8馬種で約2500頭が日本在来馬として飼養されています。これら在来の馬は、昔から日本人のくらしと密接に関わりあいながら生きてきました。現在の日本では、馬という動物は珍しくなってしまいましたが、ほんの一昔前まで日本人にとって馬は、犬や猫のように身近な動物であったのです。

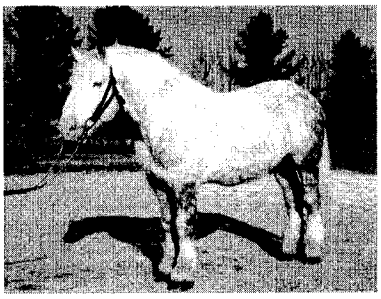
馬の大きさを表わすのに「体高」という言葉を使います。「体高」とは、人間の身長のように足から頭の先までの長さではなく、地面から馬の背中の一番高い部位（「き甲」と呼びます）までの高さのことです。

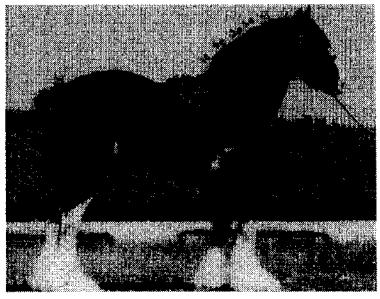
みなさんは「ポニー」という馬を知っていますか？実は、これは品種の名前ではありません。体高が148cm未満の馬（horse）のことをポニー（pony）と呼ぶのです。

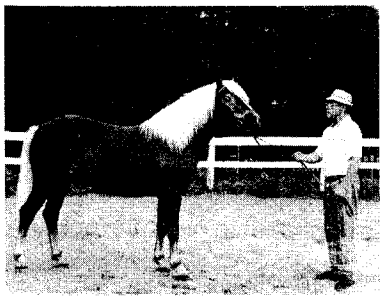
前にも述べたように、馬は用途によってその品種が作られてきました。日本では、馬の種類を次のように分けることがあります。

●軽　種：サラブレッド、アングロアラブ、アラブなど、主に競走馬に用いられる品種。
●重　種：ペルシュロン、ブルトンなど、主として農耕や馬車を引くなど使役に用いられる品種。
●中間種：ハノーバー、ウェストファーレン、クォーターホースなど乗馬を中心に用いられる品類。
●日本在来種：北海道和種馬、木曽馬など8馬種。

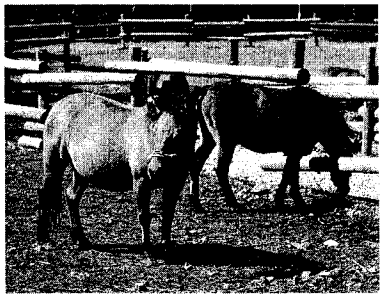

▲ニュージーランドハンター


▲ペルシュロン


▲クライスデール


▲ハーフリンガー

▲シェトランドポニー

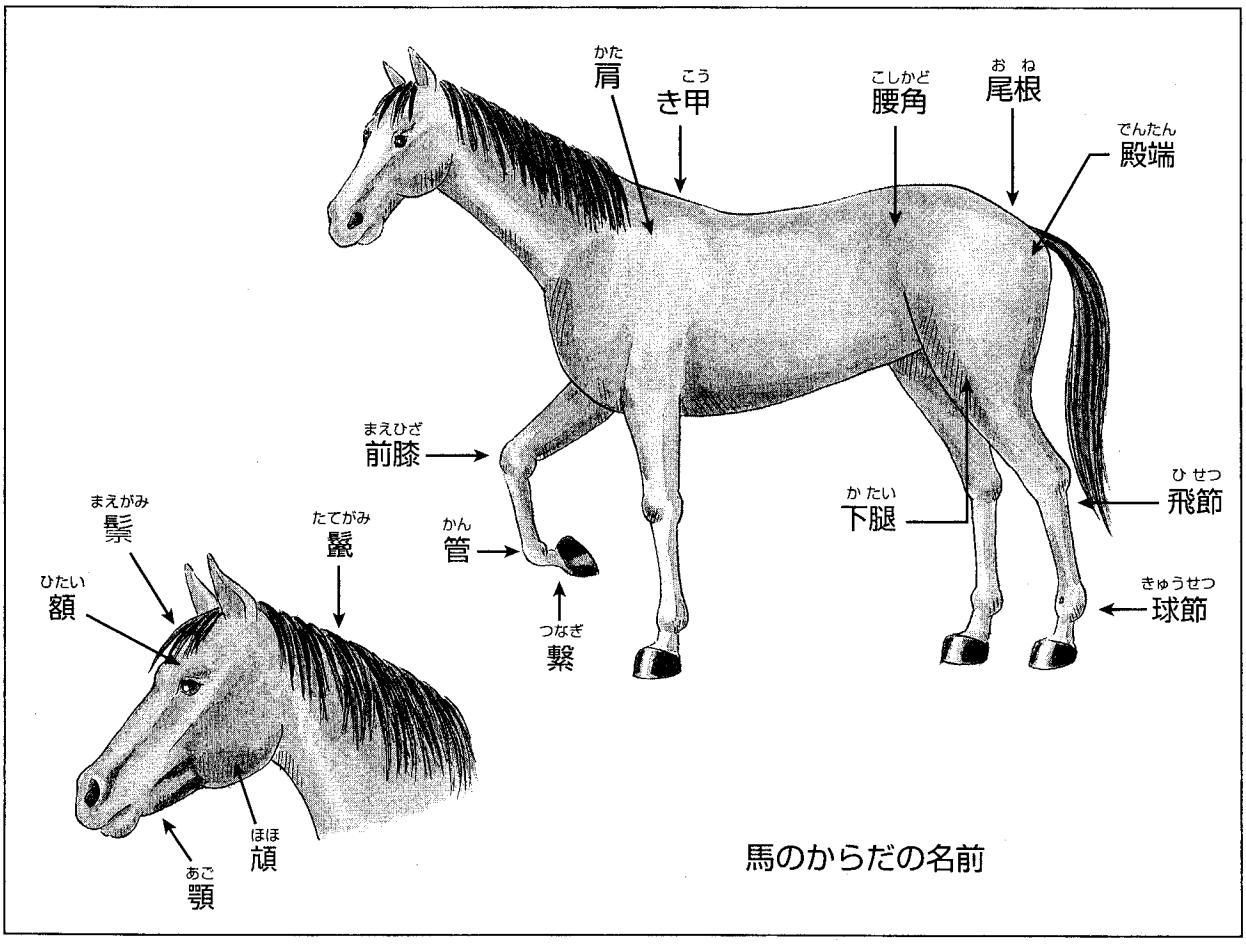

▲木曽馬

2 馬という動物を知ろう

馬のからだ

馬は、サイやバクなどとともに「蹄(ひづめ)」として知られている硬い爪が変化したものが１本の脚に1個もしくは3個ある動物の仲間に分類される草食性の動物です。馬の蹄は、人間の手の中指にあたる爪が変化をしたものです。他の4本の指は、退化をして、馬の体重を支えていません。しかも、骨の位置を考えると、手の平で立っているのではなく中指の爪先にあたるところだけで数百kgの体重を支えているのです。つまり、馬は中指1本だけで爪先立ちをしている状態なのです。馬は早く走って肉食動物から逃げるために1つの蹄を持つようになったといわれています。そのため、蹄に体重の全てがかかっています。ですから、脚を大切にしないと、思わぬ怪我や病気につながる事があります。

馬の体の各部分には独特な呼び名がついています。主な部位の名前を体の各部分に分けて紹介します。



馬のからだの名前

馬の性質

馬は、もともと草食動物であったことから、いつも他の肉食動物に襲われる危険から身を守る生活をしてきました。そのため、馬の感覚はとても発達していて、視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚の五感を最大限に利用して生きています。したがって、馬はとても臆病な性格を持ち、周りの様子を常に気にしているので、騒がしいところや大きな音にとても驚く事があります。また、馬は真後ろをのぞいて350度の視野があるといわれています。私たちが馬と上手にそして事故がないように付き合うためには、馬を驚かせる事がないように細心の注意をして、馬にとって居心地の場所と環境を用意してあげる事が大切です。しかし、常に周りの様子を気にするという馬たちの慎重な性格は、私たちにとって馬と一緒に取り組みを行う際にはとても役に立つ面もあります。

馬は、表情の豊かな動物であるといわれる事があります。これは、外部の情報を得るための聴覚や視覚の器官である耳や目が実に様々な馬の気持ちを表わしているからです。耳の様子や目の動き、体の動きは、馬の精神の状態を的確に表現しているものです。馬の気持ちを理解するには、このわずかな変化に気づいてあげる事が大切です。

馬は、実際に付き合えば付き合うほどいろいろなことを教えてくれます。そして、馬のことを知れば知るほど付き合いが上手になり、馬と一緒に活動をする事ができるようになります。

では、馬の健康を維持管理していくことは、馬と一緒に活動をしていく上で欠かせない大切なことの1つです。では、どのようにして馬の健康を管理して行けばよいのでしょうか。

馬の健康と病気

健康状態を感じ取る

まず大切なことは、馬のようすを感じ取ることです。一緒に生活をしている家族のことを考えてみましょう。家族の健康状態がなんとなく分かることはありませんか。毎日顔を合わせていると、今日の顔色が普段と違う、声色が変だ、ご飯の食べる量が少ないなどと普段と少し違う様子に気がついて、体調が思わしくない状態にあることを思いやることができるのではないでしょうか。

馬も、犬や猫と同じように人間とコミュニケーションをとることが出来る動物たちです。私たちの家族と同じように馬と接しコミュニケーションを取ることを通じて、馬の体調変化に気がつくことができます。体調の変化に早く気がつく事ができれば、病気にならないように予防したり、大事に至る前に獣医師に診察をしてもらう事ができ早く健康な状態に戻してあげる事ができるのです。

▲手入れを通じて馬の健康を感じる

日常の手入れと観察

次に、馬の健康状態を維持していくには、エサをやる、ブラッシングをする、運動前や運動後の世話、馬房の手入れなど、日々の馬たちとの関わりの場面で馬の変化を感じとれるようになる事が大切です。毎日のエサの食べ方に変化はないか、馬房の中に入った時におしっこやボロのニオイや形に異常はないか、何かに不安そうな表情をしていないかなど、馬の体調が悪い時に見られる変化はたくさんあります。なお、エサの食べ方やおしっこやボロのニオイなどは馬の個体差があるので、実際に付き合う馬ごとの健康な状態がわかるようになることが大切です。ブラッシングの際などに馬に直接触ることによって分かることもあります。馬の体温は、安静時には37.5～38.5度ほどで、人間の体温より1～2度ほど高いのです。また、心拍数は、安静時で1分あたり30～40回、呼吸数は10～15回前後です。これらの数値が大きく変わるような事があれば、馬体に何らかの異常があると考えていいでしょう。毎日体温や心拍数をはかる必要はありませんが、馬に触ってみていつもより体温が高いとか、呼吸数が多いかなということを感じられるような感覚を身につけられるといいでしょう。

「おかしいな」と感じること、小さな変化に気がつくことが、体の不調を見つけるきっかけとなる大切なことなのです。これらを通じて馬の調子を把握し健康管理に努める事ができるようになります。

馬の病気

馬によくみられる代表的な健康面のトラブルを紹介します。

■お腹のトラブル　疝痛（せんつう）

馬はウシなどと同じ草食動物で、1日のうち起きている時間のほとんどを草を食べるために使って生きてきました。そのため、繊維質を吸収するために非常に長く複雑に折れ曲がった消化管を持っています。この長い消化管に様々なトラブルを抱えることが多いのです。

馬が最も起こしやすい病気の1つに馬の腹痛である疝痛(せんつう)があります。疝痛の原因としては、便秘や捻転、寄生虫の寄生、気温の変化など様々なものが考えられます。馬が疝痛になると、痛みが少ないときは、苦しそうな表情で「前がき」*をしたり、体中に汗をかいたりします。だんだん痛みが強くなると、座り込んでお腹を気にしながら横になったり、お腹が痛くて寝転んだりします。また、ボロがゆるくなったり全く出なくなったりします。このような症状が出てきたら、すぐに獣医師に連絡をして指示を受ける事が大切です。

＊前がき：前あしの先で地面をくり返しひっかくようにすること（15ページ参照）

■皮膚のトラブル　皮膚病

細かい毛が密集して生えている馬にとって、フケや垢などがたまってくると、運動の際に汗をかいたときに汗と一緒になって汚れがたまり、皮膚病の原因となります。湿疹や腫れなどの皮膚の異常を見つけたら、すぐにスタッフに知らせ、獣医師に相談しましょう。皮膚の病気は、手入れ不足だけでなく、栄養の偏りや気候の変化によっても起こります。

なお、日々のブラッシングは、馬を見た目を綺麗にするだけでなく皮膚病を予防することにもなります。馬の皮膚をブラッシングすることによって、被毛の根元にたまっているフケや垢、埃などをしっかりと浮き立たせ、洗い流す事ができます。被毛の根元までしっかりとブラッシングをしながら皮膚の状態を毎日観察することによって、健康な状態を維持する事ができます。

■脚のトラブル　蹄葉炎（ていようえん）

馬の体重を支える蹄(ひづめ)のトラブルも決して少なくありません。馬を活動に使った後には、膝から下を水洗いをして、すばやく乾燥させるようにしましょう。また、蹄が乾燥しやすい冬場には、クリームや蹄油を塗布して保湿をしてあげることも必要です。蹄の裏にボロや土、汚れたオガなどが挟まっていると蹄が圧迫されて血行が悪くなり、歩きにくくなったり病気になったりすることがあります。蹄の病気としては、蹄葉炎(ていようえん)などがあります。蹄葉炎になる原因として、運動の不足による蹄の血行不良、高い栄養価のエサを与えすぎることによる蹄の血行障害、疝痛の後遺症などさまざまな原因が考えられます。脚の不具合をそのままにしておくと蹄葉炎になり、最終的に歩くことができなくなってしまうことがあります。これらの病気も早期発見早期治療が鉄則ですので、日々の手入れの中で蹄の異常を発見したら、装蹄師もしくは獣医師に相談しましょう。

■風邪

一般に馬は寒さに強いといわれますが、人間と同じように風邪もひきます。たとえば、運動の後に水洗い

をして体を濡れたままにしておいたり、寒い冬場になんの目的もなく洗い場に繋いだままにしておいたりすると馬は風邪をひいてしまいます。風邪をこじらせるとひどい場合には、肺炎などを起こして死んでしまう場合もあります。馬も人と同じ生き物です。人間にとって不愉快に感じることは馬にとっても不愉快であることが多くあります。常に馬の立場にたって、今おかれている状態が馬にとって居心地がいいのか悪いのかを考えてやれば、不必要な風邪をひくことは少なくなると思います。しかし、どんなに気をつけて馬の世話をしていても風邪をひくことはよくあります。馬が鼻水を垂らす、体温が高い、呼吸があらい、くしゃみをしているなどいつもと違う症状が出てきたら風邪ではないかと考えてください。風邪だったら、鼻水と一緒にくしゃみをして体温が高いなど、風邪の症状が体のさまざまなところに出ていることに気がつくでしょう。そのような症状を見つけたら、馬を馬房(ばぼう)に入れて寒くないようにしてから、獣医師の診断を受けるようにしましょう。

獣医の先生と仲良くなる

馬は人間と同じように実にさまざまな怪我や病気をします。馬が健康でなければ、馬を使った活動で楽しい経験やいい成果をもたらすことはできません。馬に少しでも普段と変わったところがあれば、病気の可能性があります。その時にはスタッフに話し、かかりつけの獣医師に相談しましょう。

普段から、馬の状態について獣医師と話をして信頼関係を築いていくことは、より良い診療につながります。馬の健康を維持するためには馬だけでなく、馬に関わる人たちと同士がコミュニケーションをとり信頼関係を作っておく事がとても大切なことなのです。馬の体のことについて気にかかることや疑問点が出てきたら、どんな些細なことでもスタッフや獣医師に相談してみましょう。

(川嶋　舟)

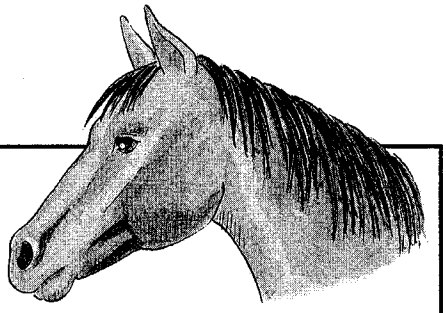
もっと詳しく知りたい人のために

馬（ウマ）という生物

普段私たちがウマと呼んでいる仲間は、哺乳綱 Mammals 奇蹄目 Perissodactyla 馬科 Equidae 馬属 Equus 馬 *Equus caballus* に分類される草食性の動物です。

奇蹄目は、「蹄(ひづめ)」として知られている硬い爪が変化したものが、１本の脚に1個もしくは3個ある動物（奇蹄目）の仲間で、ウマの他にバク、サイなど3科5属23種が分類されています。他に、蹄が1本の脚に偶数個ある動物の仲間は偶蹄目とよばれ、ウシなど約80属185種が知られています。

馬属 *Equus* には、現在は6種類いるといわれています。私たちがふだんウマ horse と呼んでいるものは、*Equus caballus* または *Equus ferus* で、シェットランド・ポニーからホルスタインのように大小実にさまざまですが、現存する全てのウマの品種はここに分類されています。モンゴルの高原地帯に棲息し、現在唯一の野生のウマとして知られるモウコノウマ *E. ferus prezewalskii* もここに分類されています。ユーラシアで使役用の家畜として飼養されているロバは、*Equus asinus* です。*Equus onager* は、アジアノロバとして知られており、オナガーともいわれています。残りの3種は、シマウマとして知られているもので、南アフリカに棲息するヤマシマウマ *Equus zebra* 、北および中央アフリカに棲息するグレービーシマウマ *Equus grevyi* 、サハラ以南の東アフリカに棲息するベーチェルズシマウマ *Equus burchelli* が知られています。



普段私たちは、家畜ウマ *E.caballus*のことをウマと呼んでいます。家畜ウマは人間とともに生活をすることを受け入れ、人間の手で利用しやすいように改良されて生産が行われてきました。その結果、世界各地で、さまざまな目的と環境に応じて、多くの品種が作られ現在に至っているのです。その数多くいるウマの中から私たちは、自分たちが利用する目的に応じて使うことの出来るウマを見つけ出し、一緒に活動をして行く仲間を決めるのです。

食べたものの消化

ウマはウシなどと同じ草食動物で、1日のなかで起きているほとんどの時間を草を食べるために使って生きてきました。繊維質の多い草から大きな体を維持するのに必要なエネルギーを吸収するためには、繊維分を吸収する仕組みが必要です。ウシやヒツジなどの反芻動物は、第1～4胃まで4つの胃をもち、特に第1胃と第2胃で微生物による発酵を行うことを知られています。しかし、1つしか胃を持たないウマは、植物の繊維分を効率よく吸収するために、微生物の働きによる繊維質の分解発酵の場所として大腸が発達しています。そのため、非常に長く複雑に折れ曲がった消化管を持っています。そのため、この長い消化管に疝痛などの様々なトラブルを抱えてしまうことが多いのです。

（川嶋　舟）